

日本イエズス会画派の二潮流

—《泰西風俗図屏風》《チュニス/レパント戦闘図・世界地図屏風》、そして《ザビエル像》《マリア十五玄義図》を中心に—

児嶋 由枝（早稲田大学）

ナポリ王国出身イエズス会士で画家のジョヴァンニ・コーラは、1583年来日し、長崎周辺や天草で画学舎（羅:seminarium pictorum、または葡:seminário dos pintores、直訳は「画家達のセミナリオ」）を主宰して西洋画技法を伝えた。発表においては、このイエズス会画学舎の生徒たちに帰属される作品群におおまかに二つの潮流がみられることを提起する。論点は多岐にわたり、またテーマ自体も大きいため、研究現状報告として現在の見解の概要を述べることとなる。

発表では本論に入る前にまず、コーラの画学舎の生徒の手になる作品を、個々の画家への帰属は困難であるにしても、いくつか手を見分けることが可能であることに言及する。さらに、コーラの画学舎で学んだ画家の名前や彼らの移動に関して現時点で一次史料調査から判明していることを述べる。1614年にコーラとともにマカオに逃れた後、マニラに移動し、その後、帰国して殉教した日本人画家の存在や、従来の見解に反し、日本とポルトガルとの通商が断絶する1539年まではコーラの画学舎で学んだ日本人画家のうち何人かは日本で制作活動を続けていたと推察される点は注目すべきであろう。

日本イエズス会画派の二潮流は、結論から述べると、①キリシタン大名など上層階級の信者を対象とした様式、図像ともに洗練された造形と、②ひろく一般信徒を対象とした様式、図像ともにシンプルな造形である。

①については、《泰西風俗図屏風》（福岡市美術館、MOA美術館）と《チュニス/レパント戦闘図・世界地図屏風》（香雪美術館）に注目し、いずれも極めて精巧にキリスト教主題が織り込まれていることを論じる。《泰西風俗図屏風》については、時間軸に沿って世俗から聖、地上の快楽から孤独な信仰の世界への展開が表されていることを議論する。《チュニス/レパント戦闘図》は、チュニス攻略やレパント海戦など具体的な戦闘の場面ではなく、キリスト教と異教の闘いが表されていることを、同時代の絵画や版画から示唆する。②については、《ザビエル像》（神戸市立博物館）《マリア十五玄義図》（京都大学、茨木市東家）を取り上げる。《ザビエル像》については、各種ザビエル伝やザビエル像版画なども手がかりとしながら、1622年の列聖勅書と関連し、聖体を中心主題であることを論じる。《マリア十五玄義図》についても聖体が主題であることを、図像と銘文などから検証する。そして、当時のカトリック教会が聖体の実質変化を称揚していたこと、そして絶対的な司祭不足のために聖体拝領が困難であった当時の日本では聖体が特に重要な意味を有しており、聖体にまつわる奇蹟譚も多いことに注目する。そして、同時代の日本における聖体や聖像に関する一次史料も参照しながら、《ザビエル像》と《マリア十五玄義図》の機能について議論する。